

研修レポート

「梅のカットバック剪定講習会～JA 紀の里梅部会の取り組み～」

JAグループ和歌山農業振興センター

●はじめに

令和2年11月20日、紀の川市打田にて、JA紀の里梅部会（会長：杉井正幸氏）の現地研修会が開催されました。

研修会のテーマは、『ウメ「南高」のカットバックおよび摘心処理による青梅生産性の向上』についてです。講師には、県うめ研究所の城村主査研究員と又曾副主査が招かれました。参加者は、組合員11名、JA紀の里営農指導員6名、振興センター1名、那賀振興局1名の計19名となりました。

●梅のカットバックと摘心処理の概要

カットバックのメリットは、低い位置で青梅の収穫作業ができることですが、デメリットは、樹容積の減少により収量が低下することです。

そこで、4月の摘心処理により、花芽の着生を増やすことで収量を補うとともに、徒長枝の発生抑制により剪定時間を短縮することができます。カットバックと摘心を組み合わせることで、収量を低下させずに省力樹形に改造できます。

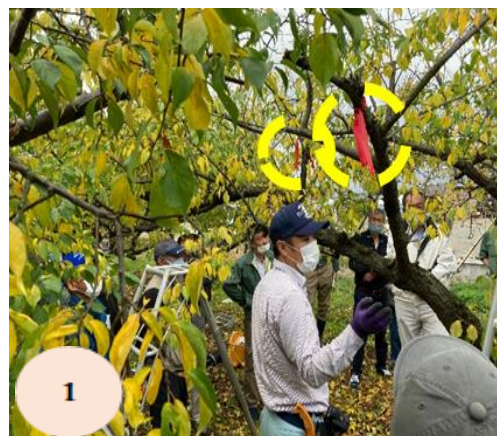
下の写真は、左；処理前と右；処理後です。



※低樹高省力多収栽培技術を導入する場合の留意点

まず、最初に①春季の摘心処理を行い翌年の結果枝を確保してください。その後、同年の②秋冬季にカットバック処理を行ってください。この順番で処理を行うと収量は減少することなく年々増加傾向となり、既存の樹を収量が優れる省力樹形とすることができます。なお、技術面やデータ等の詳細については、「和歌山の果樹 2021年2月号」に掲載されています。

●カットバック手順について



①カットバック処理を予定する主枝にカラーテープでマーク（黄色の囲い）し、完成をイメージします。マークすることで落葉前でも、処理後の樹形全体をイメージしやすくなります。なお、位置は、地上から約2.5mとしました。



②主枝背面の枝、内向き枝などの太い枝を整理し、樹を全体的に整枝します。カットバック前に、大まかな整枝をすることで作業スペースを確保することができます。



③チェーンソー等でカットバック処理（黄色の囲い）します。さらに、細い枝など細かい枝を整理し、仕上げの剪定を行います。



④完成。落葉後の様子。

●今後の予定

J A紀の里梅部会では、令和3年度は電動バリカンを利用した摘心研修会を予定しています。摘心処理に、電動バリカンを用いると大幅な労力軽減ができます。

平年ですと、県南部の梅主産地では、一回目の摘心の適期は、樹から発生する新梢が平均20cm程度となる時期で4月中下旬頃、二回目の摘心の適期は、その約2週間後で5月上中旬頃実施しています。紀北地域では、気象条件の違いから、県南部と比べ1-2週間遅い時期が適期と思われます。

なお、今回の研修では、研修上の都合で、摘心処理前にカットバック処理を行いました。



電動バリカンを利用した摘心の様子。

●おわりに

カットバック処理と摘心処理を組み合わせると、省力的かつ作柄の安定した青梅栽培ができます。

生産現場では、農家の高齢化や担い手不足が一層の深刻さを増しています。今回紹介しました農業技術「カットバックおよび摘心処理」が問題解決の一つであると考えています。ぜひとも技術の導入をご検討ください。